NPO법인
삼천리철도

NEWS LETTER

三千里

Vol. 18
2011年7月号

発行
NPO法人 三千里鐵道
〒441-0109
愛知県豊橋市下五井町青木31
TEL.0532-53-6999
FAX.0532-54-4931

白熱した討論会、平和と統一を叫ぶ

都相太随想集『非武装地帯に立つ』出版記念会も和やかに開催

総合司会の康宗憲氏

毎年6.15記念集会には、韓国からゲストを招聘するか、在日の作家、学者等を招き開催してきた。11年目の今回は趣を変え、6.15宣言11周年記念『朝鮮半島に平和を!大討論会』と題して、平和を憂う在日と日本市民だけで、忌憚のない討論をしてみようと、このような企画になった。

主催者側からすれば正直読めない不安な状況での開催であったが、予想を越える参加者で会場は終始熱気に包まれた。そして休戦以後最大の戦争危機を迎えた昨年と今年にかけて、朝鮮半島と東北アジアの平和を希求する参加者の想いがほとばしる中で、討論会は進められた。

スリリングな展開ではあったが、総合司会の康宗憲氏の巧みな進行で、無事終了した。

記念行事の2部は、場所をサンルートに移し都相太随想集『非武装地帯に立つ』出版記念会があった。この日は著者の古希も重なり、著者の恩師や先輩、知人、友人、親族からの祝辞が続き、密かに準備された伝統舞踊や芸能公演が華を添えた。

それぞれの発言

総合進行を担当された康宗憲氏は『皆さん、今日は制約なしに語りましょう。政治は政治家の独占物ではありません。』と切り出し、討論会のテーマをいくつか提示した。活発な発言がつづいた。以下3名の発言骨子を紹介する。

鄭禧淳さん
京都コリアン生活センター
「エルファ」理事長

京都で在日の高齢者介護センターをしています。現在150名ほどの在日一世の方が、デイサービスや障害者介護を受けています。日々一世の方たちと接するなかで、統一はもう諦めたと言います。でも韓国から施設を訪問される方たちと会うと、故郷に行ってみたい、北の家族と会いたいと胸の内を吐露します。統一がどんどん遠くなっていくようで…、それでも切実に統一を願う一世の心情なのでしょう。

私も何度か統一を実感したことがあります。高校3年の時に4.19に接し、すぐそこまで統一が来たのだと喜びました。2000年の6.15の時は、施設の一世のハルモニたちと一緒にマンセーを叫び抱きあって喜びました。しかし、李明博大統領になって、統一より戦争危機へと逆行するようになり、金大中・ノムヒョン時代に行けた先祖の墓参りの道も閉ざされ、残り少ない命の灯火を思い、つい諦めを口にするようになったのだと思います。

しかし私は諦めません。私の父は遺言に『あ、祖国よ！　私は異国の地で死ぬが、息子・娘たちは統一された祖国に生きよ。』と書き残しました。私は、施設の一世の方たちが生きている内に、故郷に連れて行きたい、と思っています。私の立ち位置で何ができるかを常に考えながら、一つ一つ取り組んでゆきたいと思っています。

厳敞俊さん
コリア国際学園　校長

韓国から1992年に来日した新在日です。いまKISの教員をしています。担当は校長です。私はベルリンの壁崩壊後に来たので、5年位すれば南北の壁も崩れるのではと期待しましたが、北の核と拉致問題で逆戻りしました。

先ほど在日60数年の先輩から、全ての原因はアメリカにあると言われました。

確かにそうですが、私は角度を変えて見たいと思います。結局民族内部がしっかりしていれば、切り拓いて行けたのではないかと思います。

民族内部問題とは、結局南と北の問題。そのうち北は責任能力に欠け受動的存在、南はより責任能力はあるが自由民主国家なので主権在民、MBのような大統領を選んだ国民に責任がある、と私は考えます。

責任と言えば、在日こそより責任があると言えます。南にいると内のことがよく見えないが、外にいると南も北も外国もよく見えるのです。だから総合的な観点から発言することができるのです。ところが組織に縛られ、統一への阻害要因になっているように見えます。統一に寄与しない組織に何の意味があるのでしょうか?

KISは小さな学校です。そんな壁や境界線を自由に飛び越えられる越境人、日本・朝鮮・韓国をつなぐ人材に、在日の子供たちを育ててゆきたいと願っています。

“憎悪から愛に、過去から未来に、組織から人間に”を実践すれば、アジアに平和が訪れます。そしてわが民族も、自ら願って分断されたのではないので、必ず一つになります。そう信じることです。

高橋信さん
愛知県平和委員会
理事長等

私は常に、東アジアから米軍が撤退し、朝鮮半島が統一された平和な世界をイメージしながら、日々を過ごしています。

東アジアで米軍基地のある国は、日本と韓国だけです。そこに駐留米軍の85パーセント（約10万名）が集中し、この地域の平和を脅かしているのです。

今回の東日本大震災で米軍がいわゆる『トモダチ作戦』を自衛隊と共同で展開し、やや正体が見えにくくなっているが、日本のアメリカ従属体制・日米安保体制は、本質的に日本の平和と朝鮮半島の平和統一の大きな阻害要因です。よって日朝の市民は常に手を携え、共通の目標に向けて進まなければならないのです。

日本は未だ明確な過去の清算を拒み続けています。過去最大の軍需産業であった三菱名古屋に連れてこられた女子挺身隊の戦後補償についても、拒否し続けて来ました。最近になってやっと協議に応じるようになりましたが、これは粘り強い私たちの闘いの結果に他なりません。

これからも私たちは、憲法9条と日本の平和に軸足を置き、過去の清算に基づいた日朝、日韓の連帯を強化しながらこの運動を進めて行きます。

都相太随想集
非武装地帯に立つ
出版記念会開催

この本は著者にとって処女出版になる。周辺から推されてやむなく出版した経緯もあって、知らせを聞き駆け付けた参加者は、一様に喜びを笑顔で表していた。著者がこれまで育んできた濃密で幅広い交友関係が、この日の会場に開花したのだ。

韓国の元統一部林東源長官祝賀の花輪が見つめる中、詩人金時鐘先生、環境副大臣の衆議院議員近藤昭一先生の祝電紹介の後、著者の恩師や先輩、同僚や友人から次々とお祝いの言葉が披露された。

この本には、三千里鐵道10年の道のりと今後の展望が、著者の手紙、発言、アピール、感想文などを織り交ぜながら、生き生きとした再現されている。

希有な在日2世・著者の語る、祖国と在日、自然と命への慈しみと愛に、触れてみませんか?

（4面につづく）

新刊紹介

“汗を流すことは喜び、普段着の統一事業をしたい”
飾らず気張らず偏らず、しかし懸命に生きた

在日二世が、祖国と在日を語る

われわれは、自然がうたい鉄馬が走る非武装地帯にこそ、海外同胞のふるさとを求めたいと考える。
（三千里鐵道宣言　2001.6　名古屋）

本書の主な内容

第一章　三千里鐵道と歩んだ10年
第二章　随想―民族、統一、在日
第三章　ハンギョレ統一文化賞、都羅山訪問
第四章　夢は三千里牧場
第五章　三千里鐵道と私

※本の入手方法は、同封した注文書をご参考下さい。

（編集部）

チャンチ(祝祭)のような
出版記念会

会は終始和やかな雰囲気に包まれた。冒頭の祝辞で呉炳学画伯は、“南北合作が叫ばれたあの時期、唯一人行動で祖国愛を実践した人物”と著者を讃えた。次に立ったKISの宋在星理事長は、“朝鮮半島のど真ん中に立って豚と枕木をダシにして南北に睨みをきかし、日本のほぼ中心である豊橋から在日同胞に向け夢の運動を声高らかに呼びかけた、このとんでもない後輩の出版記念会を祝う”と話すと、会場から拍手と笑い声が鳴り響いた。

はじめ緊張していたこの日の主人公も、会が進むにつれ本来の姿を見せ始めた。古希の祝いを兼ねた孫たちの花束とたどたどしいお祝いの言葉に、つい表情を崩し一人ひとり抱きしめていた。

李時雨講演会、名古屋でも開催

朝鮮半島西海の緊迫した空気、生々しく伝える

昨年の天安艦沈没、ヨンピョン島砲撃事件は、2011年の朝鮮半島、東アジアにも暗い影を投げかけた。年明けから不穏な空気の漂う中、今年2月27日、東京につづき開催された名古屋での李時雨講演会は、口コミで多くの在日と日本市民が集まった。

会場の名古屋都市センターで、講師は穏やかな笑みをたたえながら、第一声を発した。

「今日のタイトルは『ヨンピョン島とUN軍司令部』です。

…今回の事態の本質は領土問題です。陸地とは異なって西海、漢江河口には1953年休戦協定時に、特に定まった境界線はありません。…」

少し難解ではあったが、昨年11月の砲撃事件の本質を解明し、朝鮮半島のおかれた歴史的経緯、地政学的意義から、現在日本までを含めたUN軍司令部の役割と存在、平和への脅威を得意の写真を駆使しながら説いた。

参加者の多くは、日頃から李時雨氏を知り、平和運動家としての彼を支持し、尊敬してきたこともあって、2次会は和やかな交流の場となった。大阪から駆け付けた西村さん(大阪で李時雨写真展を開催)、不戦ネットワークのメンバー、沖縄問題に携わっている方々などが見られた。

講師のご夫人であり同志である金銀玉さんも同行された講演会は、自然な流れで「李時雨を囲む会」へとつながった。

ご夫婦は翌日岩国の米軍基地を取材、玄界灘を渡り米韓軍事演習のため釜山港に停泊する船舶等を観察し、活動拠点の江華島の自宅に帰った。

後日談―日本での講演・取材旅行は、統一ニュース等に掲載された。　その後江華島を訪れた韓基徳氏らを迎える様子が彼のホームページに紹介された。

2010年度総会報告

着実な歩みに誇り、具体的な目標を掲げ

去る6月12日午前11時、名古屋名進研ホール会議室において2010年度総会が開催された。

11年目に突入した三千里鐵道の活動の中で、10周年の昨年はとりわけ大切な年度であった。

総会は、まず都相太理事長、近藤昭一先生の挨拶から始まった。

次に2010年度事業報告では、

1. ハンギョレ統一文化賞受賞
2. 6.15・三千里鐵道10周年記念討論会『東北アジアの平和を求めて』開催。
3. 『三千里牧場』開業。朝鮮半島北域での養豚団地造成を目指し、実験開始
4. ブログ、ニュースレター16、17号発行など広報活動の継続
5. 共同記者会見―朝鮮半島の平和を求め南北両政府に対する要請書発表
6. 李時雨講演会開催、写真展も
7. 『日韓併合』100年・東海行動

等、日本の市民団体との連携強化等の活動報告があった。

◎2011年度の事業計画については

1. 『三千里牧場』実験継続中!
2. 在外同胞選挙権に関する広報活動、『投票2012』参加
3. 呉炳学個展、新宿梁山泊豊橋テント公演協賛

等の活動予定が発表された。

最後に役員改選があり、康宗憲氏が当NPO法人の顧問に就任した。

連帯 東北アジアの平和

宋神道さん大震災・津波から生還 東京で新生活スタート

宋神道（ソン・シンド）さん、絶望の淵から無事の吉報に感激。心配していた国内外みなさんと喜びを分かち合った。宮城県女川町の自宅におられた日本軍「慰安婦」被害者、在日の宋神道さんは、3月11日東日本大震災・津波に襲われ、愛犬マリコとともに地元の人々の決死の救助によって、高台へそして避難所へ移動でき九死に一生を得られた。

足腰不調の88歳。戦中戦後の艱難辛苦をくぐり抜け、今回大震災・津波による壊滅状態から脱出。裸足の逃避行だった。たぐいまれな生命力に驚嘆の一語。

夢みてるみてぇだ。笑顔の宋さん（2011年5月21日撮影）

宋神道さん
（2011年5月21日撮影）

ただならぬ地震・津波に、宋神道さんの安否を問い合わせると、不明。交通、通信断絶。いかんともできず長年宋さんを支えてきたメンバーみなさんの焦燥感が目に見えるようであった。ありとあらゆる策を使い探索の結果、被災された仙台の女性たちや新聞記者の尽力によって避難先が判明、被災8日目に無事を確認。9日目の19日に東京からかけつけた「支える会」の川田文子さんらと再会。仙台から丸一日かけて東京へ移り落ち着かれた。

当初、いつもの鋭い言葉や闊達な行動、豊かな表情が消え、被災の恐怖にうちのめされている様子。毎食後、ひたすら寝ておられた。避難所での寒さ、睡眠不足をとり戻すかのように。その後次第に快復、韓国語の「慰安婦」証言集を読破され笑顔が戻ってきた。「よく生き延びたもんだ」と涙。「オレ、死んでるもんだか生きてるもんだか分かんねぇ」、「夢見てるみてぇだ」。

宋さんは「戦争は絶対だめ」、「こんなむごい体験、二度と起こしてはいかん」と、集会で必ず語気強く訴え、広く影響を与えている。まさに、日本軍「慰安婦」制度の生き証人であり、すぐれた反戦活動家です。

「慰安婦」解決を願い活動している全国の30人が、5月東京に参集した際。生還2ヵ月の宋さんを囲み昼食会を開いた。着席するなり立て続けに歌をうたい、元気いっぱい。笑顔でおだやかな表情。再会でき一同感無量だった。

東京の見晴らしの良い新居に入り、新生活がスタートしました。

（旧日本軍による性的被害女性を支える会―久野綾子）

ご案内

丹波マンガン記念館、7月から開館

1989年から20年間、鉱山労働者の苦難の歴史を伝えて来たが、2009年に惜しまれながら閉館した。朝鮮半島からの労働者、日本人労働者のこの過酷な採掘現場は、日本の戦争責任、侵略の物言わぬ証言者であった。その再開館を望む声が、同胞から、日本人から、そして韓国から巻き起こり、この度ついに新たなスタートを切ることになった。去る6月26日、関係者の見守る中で『再開館式』が行われた。7月3日から一般来館者を受け入れると発表。

『新装開館』とはならなかったが、多くの温かい、そして切実な志に支えられたスタートに喝采を送る。

◎ご利用時の問合せ先／☎075-681-0280

韓国の国政選挙に、私たちの一票を投票しましょう

2009年2月12日の公職選挙法改正により、約300万人といわれる在外同胞も国民としての主権を行使することができるようになりました。

来年には、4月の国会議員選挙と12月の大統領選挙が予定されていて、これに投票することができるようになったのです。

しかし、このような制度ができたことを、まだほとんどの同胞は知らないでいます。また知ってはいても、具体的な手続きについてはわからないというのが現状ではないでしょうか。

三千里鐵道では、事務局会議でこのことを議論し、この制度を広く広報する団体の必要性について合意をし、広く呼び掛けていくことになりました。

6月30日には、日本全国の領事館で、第2回目の模擬投票が行われました。しかし、この模擬投票があったことを、どれほどの同胞が知っていたでしょうか。

その最も大きな原因は、既成の同胞団体が弱体化し、同胞社会のネットワークが急速に衰えているために、有効な広報手段がないことだと思われます。

領事館は、とりあえず民団に情報を流したのですが、それが団員大衆に伝えられていたわけではありませんでした。いくつかのイベントで、告知がなされたようですが、その数は、同胞全体から見ればスズメの涙ほどに過ぎなかったのです。

そのような現状の中で、これから結成しようとしている『投票2012』（仮称）には、すでに大きな期待の声が寄せられています。

私たちが描くイメージは、このようなものです。

まず、同胞社会各界各層から賛同人を100人募ります。

その100人の賛同人が、1,000人の同胞ネットワークを作り、10,000人の同胞の投票を実現します。

事務所を開設し、わかりやすい広報パンフを制作し、そのパンフが同胞ネットワークの中で活用されます。

電話による質問等にも対応できるようにし、ホームページを開設して、投票制度の広報をするとともに、質問箱も準備されます。

そして、この投票の機会は、一人でも多くの同胞が、在日を生きる自らの存在の意味について、そして南北に分断された祖国との関係について、深く考える機会になることと思います。

同胞の皆さん、『投票2012』（仮称）に、ぜひご参加いただきますようお願いいたします。

（文責：事務局長　韓基徳）

『投票2012』（仮称）結成の呼びかけ

在日同胞各位

すでにご承知の方も多いと思いますが、来年2012年から海外同胞も国政選挙に参加できるようになりました。

この権利は、1995年に在日同胞の在外韓国人本国参政権連絡会議が、在外同胞に国政参政権を求めて裁判を提起したことから勝ち取られたものです。

2009年2月、韓国国会は2007年の憲法裁判所の憲法不合致の判断を受け、『海外に居住する韓国人に本国の選挙権を付与する公職選挙法等の改正法案』を可決しました。

これにより2012年4月11日の国会議員比例区選挙、12月19日の大統領選挙に海外からも投票することができるようになったのです。

そして、初めてのことでもあり、昨年11月には、試験的に東京及び大阪の領事館で模擬投票も実施されました。

私はこの国政参政権が、海外同胞が国政に自らの意見を直接反映できる権利であると同時に、海外同胞としての私たち自身の在り様を問い直すよい機会になるとも考えています。

それで、一人でも多くの在日同胞に、この国政参政権付与の意義を伝え、投票参加を呼び掛けたいと思います。

つきましては、ぜひこの運動を多くの同胞の賛同を得て共にしていくための団体が必要と思い、このように呼びかける次第です。

現在、計画していることは下記の通りです。

1. 団体名称　『投票2012』（仮称）
2. 結成時期　2011年8月15日前後　　東京で
3. 活動課題　国政参政権の意義及び投票制度の周知広報活動
   ※特定政党を応援するための団体ではありません。
4. 賛同人呼びかけ　『投票2012』（仮称）の賛同人を在日同胞各界各層から募集

2012年4月

特定非営利活動法人　三千里鐵道
理事長　都相太

呉炳学個展名古屋と豊橋で開催

呉炳学近作展
名古屋・妙香園画廊
（2011年10月6日～11日）

呉炳学展
豊橋美術博物館
（2012年2月7日～12日）

三千里鐵道の発行した夢切符、ご記憶ですか？　その原画を描かれた呉炳学画伯が、今年の10月と来年2月に、それぞれ名古屋と豊橋で個展を開催する。

先日開催場所の下見に、豊橋を訪れた。豊橋駅に下り立った画伯を都相太理事長が出迎え、その足で豊橋美術博物館を見学された。

職員の丁重な案内で展示場をご覧になった後、しばし博物館内の喫茶店でくつろがれた。

立派な美術館と満足された画伯は、現在8割がた描き上げている大作「タルチュム（仮面舞）」について話し出した。

この作品のモチーフは、仮面の裏に隠された民衆の苦しみや怒り、誇りと底知れぬエネルギーを表現したいとの心情から、と話される画伯の脳裏には、この広い展示室に飾られる一世一代の大作の完成した姿が、すでに描かれていたのかも知れない。

筆を取りキャンパスに向かうときは、20代の気迫で臨むと語られる画伯、この地域に在日同胞が多くいることを伝えると、ご自身の作品と観客との感動的な出会いを思い浮かべられたのか、高齢を感じさせない瑞々しい情熱と気迫で語られた。

呉炳学画伯は翌日、名古屋での個展会場を視察された後、三千里鐵道の6.15記念行事にも参加された。

新宿梁山泊豊橋で「ベンガルの虎」テント公演

日時　2011年10月7日㈮、8日㈯、9日㈰
毎回 19:00開演

場所　豊橋市：松葉公園　特設テント
（JR豊橋駅より徒歩10分）

料金　前売・予約　3,500円
（開始は8月上旬予定 当日は300円増し）
学　生　2,500円

問い合わせ　新宿梁山泊事務所　03-3385-7971

平成23年度文化庁トップレベル舞台芸術創造事業認定『ベンガルの虎』（作／唐十郎、演出／金守珍）が、初めて豊橋の地に来る。

新宿梁山泊は、赤テントで知られる状況劇場を正統継承した劇団として、金守珍を中心に24年前結成された。あれから劇団は、世界を舞台に活躍し、特に韓国での公演では大きな反響を呼んできた。

今回は5年ぶりのテント公演という。原点に立ち返り、演劇界の革命児と呼ばれた劇団の魅力を、豊橋の地で再現する。尚、今回の舞台には豊橋市出身の全原徳和、田原市出身の渡会久美子が準主役で出演する。

［あらすじ］　劇作家。唐十郎氏の最高傑作。『ビルマの竪琴』に材をとり、物語の後日談のような形式で語られる。史実と幻想が入れ混じり、時間と空間を飛び越えて、生者と死者の境もない、ささやかな生活のある路地裏から、大陸の戦場へ、はるかな大海原へ目まぐるしく舞台は展開していく。